

植物の写真をうまく撮る際の‘役に立つかわらない’覚書 其の六の其一

レンズの種類 カメラにはいろいろな種類があるが、ここでは、レンズ交換できるカメラシステムを念頭に置き、論じたい（交換できないシステムも一部当てはまるが、レンズ交換できる方が、レンズに対してより多くの選択性があることは間違いない）。

レンズを整理すると、まずはじめに2種類にまとめられる。ひとつは単焦点レンズであり、もうひとつはズームレンズである。単焦点はその名が示す通り、一つの焦点距離をもつレンズであり、第69号の玉ねぎは35mmの単焦点レンズで写したものである。ズームはこれもその名の通り、いくつもの焦点距離が設定できるレンズであり、例えばTAMRON 社¹⁾によれば高倍率ズームとして28-300mmが販売されている。これは、28mmという焦点距離から300mmという範囲内で焦点距離を撮影者が自由に設定できるレンズということを示している。このように焦点距離を自由に設定できるレンズはすべてズームレンズとされ、一つの焦点を有する単焦点レンズとは区分されている。

この単焦点、ズームという区分の次に、レンズの焦点距離（または画角、画角については第49号を参照されたし）に注目すると、広角レンズ、標準レンズ、望遠レンズという分類ができる。広角レンズは幅広い画角で写り、標準レンズはヒトの目でみた画角に近い範囲で写り、望遠レンズはより遠くのことを捉えることができる。各社の考え方によって多少異なるが、おおよその範囲で、焦点距離が28mm以下は広角とされることが多く、50mm以上では望遠とされることが多い。ただし、実際のヒトの目でみた画角は80~90mmの焦点距離となり（と思う）、標準レンズはこれよりもやや広角として分類されている。これについては特に深い意味合いはなく（だろう）、単純にむかしからデフォルトレンズ（購入時についてくるレンズ）として50mmの焦点距離レンズが用意されており、レンズの製造工程上でもこの辺の焦点距離は生産しやすいために、この距離は標準として分類されたのではないと思われる。

以上を念頭に、先ほどのTAMRON社の28-300mmのズームレンズを見直すと、このレンズは、広角から望遠まで写すことが可能であるレンズであったことが分かる。すなわち、ズームレンズとは、どのような場面でも焦点距離を自由に操作できるレンズであり、便利なレンズであることが分かる。ただし、レンズによる写真の画質を問うと、実はズームレンズは焦点距離を自由に操作できる分、画質を犠牲にしており、単焦点レンズの方がいろいろな点で画質へのメリットが大きい（例えば、単焦点レンズは、その多くが画像の歪みが少なく、色のにじみも少なく、かつ明るさも確保されている）。

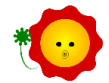


図 バラのマクロレンズによる写真

この広角、標準、望遠の他に、植物を写す際に大事となるのは、どこまで被写体によれるかということである。園芸の好きな方ならば、あるいは丹精こめて育てた花などは、なるべく植物の近くまでよって撮影したいと思う方も少なくないに違いない。どこまでよれるかについては、レンズの特性上で、最短撮影距離という値が重要になる。この距離が短いほど、被写体によることができ、これを特別に可能としたレンズが、マクロレンズと呼ばれるものである。図は50mm F2.8のマクロレンズ（最短撮影距離が18.8cm）で撮影したドライフラワー化したバラの写真である。F2.8で撮影したために、背景の「ボケ」もあるが、かなりバラの近くまでよって撮影できていることが分かる、も、其の六ではレンズの構成についても述べる予定であったが、紙面上、次で述べたい（「、」；）。

1) https://www.tamron.co.jp/all_in_one/（閲覧：2015.6.28）

植
い
き
新
聞



植物いきいきサークル

第70号

発行者:犬丸